

2021年7月4日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エゼキエル書 34 : 11～16
ルカによる福音書 15 : 1～10
「見つけた」

<見つけた者の喜び>

今日からルカによる福音書は 15 章に入ります。15 章はよく親しまれている三つのたとえ話が語られています。小見出しで言えば、『見失った羊』のたとえ、『無くした銀貨』のたとえ、『放蕩息子』のたとえです。これは三つの連続した、同じテーマを示すたとえですので、本当は三つ合わせて読んだ方が良いでしょう。そのテーマとは、「失ったものを取り戻した者の喜び」。これが、共通している内容です。

しかし、とても長くなりますし、内容も深いので、今日はまず最初の二つ、「見失った羊」と「無くした銀貨」のたとえを聞いていきたいと思います。

<誰の喜び？>

はじめの「見失った羊」のたとえは、分かりやすいですし、教会学校などで子どもたちにもよく聞かせるお話です。百匹の羊がいて、一匹が迷い出てしまった。その一匹を羊飼いが見つけるまで捜し、見つけたら喜んで肩に担いで、連れ帰ってくる、というお話です。

このお話は、「迷い出て見失われた羊がわたしたち、羊飼いが神さま、イエスさま」を表しています。ですから、わたしたちはどちらかというと、迷った羊の方の心細さや恐怖を思い、また見つけてもらった時の、羊の嬉しい気持ち、安心感を想像しがちです。

今日この後に歌う讃美歌は、200 番「小さいひつじが」という歌で、『こどもさんびか』にも入っていたので、わたしも小さい時から大好きな讃美歌ですが、その 4 番は、こういう歌詞です。「とうとうやさしい ひつじかいは、まいごのひつじを みつけました。だかれてかえる このひつじは、よろこばしさに おどりました。」

確かに、見つけ出された羊は、羊飼いの腕に抱かれて、安心して喜んだかも知れません。

でも、今日の聖書箇所には、実は、羊が喜んだ場面は全く出て来ません。喜んだのは、羊を見つけた羊飼いなのです。ここのお話し、4～6 節にはこうあります。

「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つげ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。」

とにかく、羊飼いが、見失った一匹を必死で捜し出し、見つけたら喜んで担いで帰り、友達や近所の人々を巻き込んで喜んでくれ！と言う。そういうお話なのです。

見つけた方の喜びを語っている、というのは、次の「無くした銀貨」のたとえで、より一層明確になります。

ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くした。この失われた一枚のドラクメ銀貨は、他の九枚のドラクメ銀貨からはぐれてしまって、寂しいとか悲しいとか、やがて見つけてもらって、嬉しいとか安心したとか、そんなことは何も思わないのです。

ただ、銀貨一枚を無くした女が、それを必死になって捜し出し、見つけたら周りを巻き込んで大喜びをする、という話です。

ここでは、羊飼いや女のように、自分の大切なものが失われてしまったら、熱心に、必死になって捜し回る。絶対に取り戻そうとする。そして、それが手もとに戻ったら、見つけた者は大いに喜ぶ。この見つけた者の喜びこそ、全てのたとえが、まず語りたことなのです。

ですから、よく百匹の羊の話の時に、一匹を羊飼いが捜しに行ったら、残りの九十九匹はどうなるのか。置いて行っていいのか。一匹の方が大事なのか、と引っかかる人がいます。わたしもそうでした。でも、九枚のドラクメ銀貨がちゃんと数えられて、確かに女の手許にあって心配する必要はないように、九十九匹の羊も、見失われていないから心配する必要はないのです。それらを置いて一匹を探しに行く時は、仲間か誰かに任せておけば良いのです。

ポイントなのは、大切にしているものの一つが失われること。そして、それを持ち主は絶対に諦めない、ということです。

あと九十九匹いるから、一匹くらいいいや、とか。あと銀貨は九枚残っているから、一枚くらい無くしてもいいや、とはならないのです。それを必死に捜す。何がなんでも、見つけるまで捜し出すのです。そして、見つけたなら、とても嬉しい。誰かに言いたくなるほど、大喜びせずにはいられない。それが、ここで語っていることなのです。わたしたちも、無くしたものを必死で捜して見つけた喜びは、経験があるのではないのでしょうか。

<神さまの喜び>

そして、この二つのたとえは、最後にこのように内容を説き明かしています。

「見失った羊」のたとえでは、7節「言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

「無くした銀貨」のたとえでは、10節「言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

一人の罪人、つまり、神さまに背き、離れ、滅びへと向かっていた者が、神さまの許に取り戻されること。悔い改めて、立ち帰って、本来あるべき神さまの許にいるということ。これは、神さまの大きな喜びだ。そして、天の喜び、すべての天使を巻き込むほどの、大きな喜びだ、と語っているのです。

わたしたちは、神さまのものです。神さまに造られ、命の息を吹き入れられ、神さまの養いとお守りの内に生かされているものです。神さまは、わたしたちをご自分のものとして、一人一人を愛し、一人一人を大切にしておられます。

その一人が、もし神さまから離れるなら。神さまに背いて自分勝手な道を行き、滅びへと向かっていくのなら、神さまはそれに耐えられない、と仰るのです。

神さまはそれを仕方がないとか、一人くらい、まあいいや、とは思われません。その一人を、必死になって捜しに行く。見つけるまで捜し出す。わたしたちは、神さまにとって、そのように大切な、価値ある存在である、と言われているのです。

そして、わたしたちが神さまの御許に取り戻されたなら、神さまは心から喜ばれる。天に大きな喜びがある。わたしたちの存在が、神さまのそのような喜びとされている。

この、「神さまの喜び」こそ、イエスさまが教えて下さっていることなのです。

<取り戻されるわたしたち>

だから、勘違いしてはいけないことがあります。それは、これらのたとえば、一人の罪人が悔い改めることを、神さまが喜んで下さる。天に大きな喜びがある。だから、みんな悔い改めなさい、という話ではない、ということです。

よく考えれば、失われた羊も、無くなったドラクメ銀貨も、どちらも自分で戻ってきたわけではありません。羊は、羊飼いかから離れて、群れからはぐれてしまったら、目も悪いし、弱くて野獣にも襲われるし、とても自分で帰ってくることは出来ないのです。ドラクメ銀貨はなおのこと、ただそこに落ちているだけです。

同じように、わたしたちもまた、罪に捕らわれ、神さまから離れ、迷い出てしまったなら、自分の力で神さまの許に戻ることは出来ないのです。無力で、弱い者なのです。

だからこそ、神さまは、わたしたちを取り戻すために、ご自分の愛する御子であるイエスさまを、わたしたちの羊飼いとて遣わして下さいました。

イエスさまは、わたしたちを、どのようなところでも、見つけ出すまで捜しに来て下さるお方です。わたしたちが、神さまに背き、離れ、どれだけ神さまから遠ざかっている。罪の深みに落ち込んで、動けなくなっている。倒れて、ボロボロになっている。イエスさまは、必ず来て下さり、どんな状態からでも、必ずわたしたちを救い出して下さるのです。

イエスさまは、わたしたちを取り戻すためなら、ご自分の命をも、喜んで投げ出して下さいます。わたしたちを救い出すためなら、あらゆる手を尽くして下さいます。どんな御力をも注いで下さり、どんな恵みをも喜んで与えて下さいます。それが、父なる神さまの御心なのです。イエスさまの十字架の死と復活の出来事は、わたしたちに対する神さまの熱心さと、深い愛と、憐れみの御心を示すお姿です。

そして羊飼いは、一匹の羊を見つけ出すまで捜し回り、見失った一匹の羊を見つけたら、喜んで担いで、家に帰る。イエスさまは、罪人のわたしたち一人一人を、そのようにして救い出し、罪と死から解放し、神さまの御許に大喜びで連れ帰って下さるのです。そして、そこには、天をあげての喜びが満ちるといふのです。

…だから、わたしたちは悔い改めることが出来るのです。神さまがこのようなお方だから、イエスさまがこのようにして下さるから、神さまの御許に帰ることが出来るのです。

その時、わたしたちは、喜んでわたしたちを担いで下さるイエスさまの背中に、わたしの罪のために負って下さった鞭の傷跡を見ます。わたしのために流された血を見ます。支えて下さる手に、十字架に釘打たれた痕を見ます。わたしたちはそうして、イエスさまの愛の痛みを目にしつつ、わたし自身と、わたしの全ての重荷を委ねて、背負われて行くのです。そして、神さまの許に連れ帰られたなら、神さまは喜びをもって受け入れて下さるのです。

この神さまの恵みを与えられてこそ、わたしたちは本当に悔い改めることが出来るのです。イエスさまの十字架の苦しみに、神さまから離れた自分の罪深さを思う。イエスさまが流された血に、神さまをどれだけ悲しませ、傷つけ、心労をかけたかを思う。そして、そのようなわたしのために、イエスさまがどれだけのことを成し遂げて下さったか。そして、わたしが立ち帰ることを、どれだけ喜んで下さっているかを思う。

この恵みの中で、わたしたちはやっと、御許に帰ることを願う者となれるのです。

そして、イエスさまにすべてを委ねて、すべてを担われて、神さまの御心を受け入れて、天の父なる神さまの御許に帰ることが、悔い改めるということなのです。

<みんな取り戻されようとしている>

さて、ここで今日の箇所のはじめの部分を変えて見てみたいと思います。

イエスさまは、がこれらのたとえを語られたのは、1～3 節にある場面においてでした。そこには、こうあります。「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、『この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている』と不平を言いました。そこで、イエスは次のたとえを話された。」

ファリサイ派の人々や律法学者たち、と言われる人々は、神の民の一員であり、律法の専門家です。彼らは、自分たちは神の民で、律法を守る正しい者であり、救いにふさわしい者である、自分が救いに入るのは当然である、と考えていました。

一方で彼らは、徴税人、つまり同じユダヤ人でもローマ帝国の手先のようになっている者たちや、律法を守ることが出来ない者たちを「罪人」と呼び、遠ざけていました。それらの人々は救いに与れない者であり、彼らと親しくすると、その罪の汚れが移ってしまう、と考えられていたからです。

それなのに、イエスさまはそのような者たちと共におられた。そのような者たちを受け入

れ、彼らの仲間として、一緒に食事をして過ごしておられた。そのことが信じられなかったし、受け入れがたいことだったので、ぶつぶつ不平を言った、というのです。

そこでイエスさまは、この三つのたとえ話をなさったのです。罪人と言われる人であっても、神さまの御言葉を聞き、神さまの恵みを受け取るならば、神さまはそのことを大いに喜ばれる。神さまは喜んで受け入れて下さる。イエスさまが罪人と食事を一緒になさるのは、そのことを体現しておられるのです。

一匹の羊が見つかったら、どれだけ嬉しいか。一枚のドラクメ銀貨が見つかったら、どれだけ嬉しいか。同じように、一人の罪人が、神さまの御許に取り戻されるなら、それは神さまにとっての大きな喜びなのです。

だからこそイエスさまは、人々が、わたしたちが、救いの知らせを告げる御言葉を聞き、差し伸べられた救いの御手に自分を委ね、与えられる恵みをしっかりと受け止めること、イエスさまに従う者となることを、望んでおられるのです。

1節には、「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄ってきた」とありました。彼らは世間では罪人と呼ばれ、救いから落ちた者だと考えられていましたが、イエスさまの御言葉に耳を傾け、その恵みを受け取ろうとしているのです。イエスさまに救いを求めているのです。ここに、神さまの確かな喜びがある。

そして、イエスさまは、ファリサイ派の人々や律法学者たちもまた、失われた羊として見つめておられるのです。彼らもまた、神さまの御言葉を受け入れず、御心に背き、迷い出している罪人なのです。自分の正しさに寄り縋り、自分の罪を見つめないで、高ぶり、人を裁き、御言葉を受け入れない。皆、神さまの御許から失われている。皆、神さまの御許から離れてしまっているのです。わたしたちもまた、そうです。

だからイエスさまは、すべての人を招くために、捜し出すために、連れ帰るために、わたしたちのところまで来られたのです。

一人一人が、捜し求められている。一人一人が、イエスさまによって見つけ出される。わたしたち一人一人もまた、そうやってイエスさまに救われ、担がれ、神さまの御許で生きる者となったのです。わたしたちは、神さまの大切なものです。わたしたちは、神さまに喜ばれている者です。このようにわたしたちを喜んで下さる方が、わたしたちの神さまである。それを知ることは、本当に幸いなことです。

そして、わたしたちもまた、このような神さまを、心から喜ぶ者でありたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたち一人一人を、あなたの大切な者として愛して下さい、またあなたの御心から離れてしまった時には、熱心に捜し求めて下さり、そして、神さまの御許に立ち帰る時には、天を挙げて喜んで下さる。あなたがそのような、愛と憐れみに満ちた方であることを、心から感謝いたします。

イエスさまの十字架と復活によって与えられた、あなたの救いを、愛を、恵みを、どうかわたしたちが喜んで、感謝して、心からの悔い改めを持って、受け取ることが出来るようにして下さい。

イエスさまの御手にすべてを委ねますから、あなたの御許へ連れ帰って下さい。

救い主イエスさまの御名によって祈ります。アーメン